校歌に関する調査研究Ⅲ
――佐賀県の高等学校を中心に――

牛　島　達　郎

はじめに

私は福岡女学院大学研究紀要第11号（2001年２月発行），第13号（2003年２月発行）において，校歌に関する研究Ⅰ（福岡市立小学校を中心に），校歌に関する研究Ⅱ（福岡市と筑豊地区の中学校を中心に）という表題で，校歌の歌詞の分析を試みた。その中で，「校歌とは，学校独自の教育方針と学校の環境を歌い，校風を発揚するために制定されたもの」(注1)と定義し，「教師と児童生徒によって学校が構成されているのが当然のように，校歌も学校の構成員としての位置を確立している」(注2)と述べた。

即ち，校歌の歌詞を分析してみると，その学校がどのような場所，環境に位置し，またその学校がどのような教育目標を揚げて教育しようとしているかが非常にわかりやすい。校歌の起源については，前述の拙論を参照されたい。前回までは，小学校，中学校の校歌の分析を試みたが，高等学校の校歌については全く試みていなかった。そこで，今回は，高等学校（佐賀県）の校歌の歌詞を分析することによって，小学校，中学校とのちがいが見られるか，また高等学校は校種（普通科，工業科，商業科，農業科など）において，どのような特色が見られるかを分析し，考察することにした。

1．調査研究の手続き

1．調査対象　佐賀県立公立高等学校38校

2．調査方法　佐賀県立の全高等学校から校歌を集め，次の観点から分析することにした。

3．調査日時　2002年10月～2003年７月

4．分析の主な内容

(1)　校歌に見られる道徳的な内容表現

(2)　校歌に見られる身体部位といのちの表現

(3)　校歌に見られる色彩の表現

(4)　校歌に見られる生徒表現，学校表現

(5)　校歌に見られる植物，動物

(6)　校歌に見られる自然群

・野山関係

・海洋，河川関係

(7)　校歌に多く用いられている文言

(8)　校種別に見られる特色ある表現

2．校歌の歌詞に見られる特色と考察

佐賀県は県立の高等学校が38校設置されている。その内訳は，普通高等学校20校，工業高等学校６校，商業高等学校７校，農業高等学校５校である。学科やコースの内容によっては，上記のように単純に分け難い学校もあるが，とりあえず主たる内容が設置されているという観点から４種に分類し，考察することにした。

※工業科，商業科，農業科の高等学校については以後，実業系高校と記す。

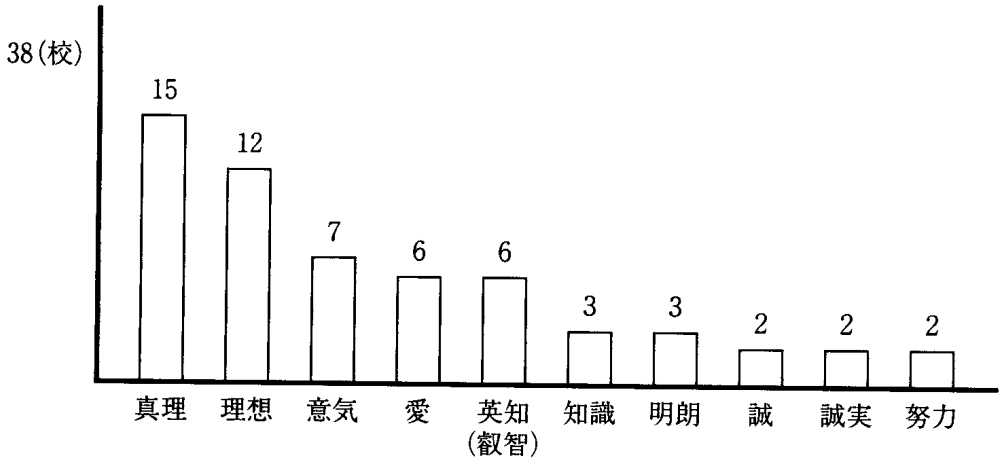
分類，考察の方法としては，研究の手続きで列記した順に，歌詞を一言一言検討し，歌詞の中に使用されている言葉の頻度を調べていき，その中から，

普通高校と実業系高校との共通点や相違点について比較検討すると共に，道徳的な内容，項目や，多く使用されている文言については，小学校，中学校とも比較，検討してみた。

(1) 校歌に見られる道徳的な内容表現

※数字は学校数

普通 (20)		商業 (7)		工業 (6)		農業 (5)		合計 (38)	
真理	10	真理	3	真理	2	愛	1	真理	15
理想	9	愛	2	理想	2	知識	1	理想	12
意気	5	英知	1	誠実	2	明朗	1	意気	7
英知(叡智)	5	意気	1	颯爽	1	意気	1	愛	6
愛	3	理想	1	友情	1	徳	1	英知(叡智)	6
知識	2	努力	1					知識	3
誠	2	明朗	1					明朗	3
明朗	1							誠	2
自律	1							誠実	2
自主	1							努力	2
清新	1								
努力	1								
友愛	1								
知	1								
正義	1								
知恵	1								



佐賀県内の公立高等学校の校歌の中に最も多く見られる道徳的項目（徳目）は「真理」である。つづいて「理想」「意気」「愛」「英知」となっている。

「真理」は普通高校で20校のうち10校に見られ，実に50％の学校に歌われていることがわかる。「真理」という文言について調べてみると「ほんとうのこと，まことの道理，真実のこと」(注3)，「正しい道理，だれも否定することのできない普遍的な妥当性のある法則，事実」(注4)とある。校歌の中での使い方としては，「深き真理」「広い真理」「無限の真理」「きわめよ真理」「求めよ真理」などがある。ほんとうの道理，正しい道理というのは，幅広く奥深いものであり，人間が生き方として道理を求め，真理を求めるのは，人間個人がよりよく生き，他人もよりよく生きるために必要なことだと思う。このような立場から見れば，人間の一生のテーマであり「真理の追求」が高等学校の多くで歌われていることは理解できる。

次に多いのが，「理想」である。普通高校においては，20校中９校において歌われ，「真理」とほぼ同じで約50％という高い数字を示している。「理想」という文言について調べてみると「将来こうありたい，また当然そうあるべきだと思いえがく姿，思いえがく望ましい完全な状態での姿」(注5)「行為，性質，状態などに関して考え得る最高の状態，未だ現実に存在しないが，実現可能なものとしての行為の目的であり，その意味で行為の起動力である」(注6)とある。

用い方としては「理想は高し」が圧倒的に多く，その他に「目ざすは理想」などが用いられている。「理想」はその意味合いから，「真理」よりは身近かな存在であると思える。しかし「理想」は自分自身の設定の仕方によって，遠くにもなり，近くにもなる。近くに設定して，実現できたら，また新たに理想をたてるであろうし，遠くの理想は常に追い求めることになろう。この追い求める姿は，自分次第で永遠にくりかえされるであろうと考えることができる。

つまり，「真理」，「理想」という二つの文言は人生において，生涯追い続

けるものであるという点から，非常に共通していると言える。人間今に満足せず，次へ次へと目標を立て，追い求める姿はすばらしく，高等学校の校歌として強い思いが伝わる文言である。

ここで福岡市の小学校，中学校の徳目的内容表現と比較してみたい。

小学校（143校）

(1) 明るい	51.0%
(2) 伸びる	40.5%
(3) 強い	39.1%
(4) 輝く	27.9%
(5) 清い	25.1%
逞しい	25.1%
(6) 理想	23.0%
(7) 励む	20.9%
(8) 正し	20.2%
(9) 仲良い	19.5%
豊か	19.5%
(10) 元気	15.3%

中学校（67校）

(1) 希望	58.2%
(2) 文化	38.8%
(3) 歴史	35.8%
(4) 理想	34.3%
(5) 真理	29.8%
(6) 平和	23.8%
(7) 英知	19.4%
(8) 未来	17.9%
(9) 誠	13.4%
(10) 意気	13.4%

この小学校，中学校との比較からわかる通り，小学校では，「明るい」「伸びる」「強い」「輝く」「清い」など平易な言葉の徳目的内容が並ぶ。中学校では「希望」「文化」「歴史」の次に「理想」，「真理」が並ぶ。

福岡市の小学校で51％と多く歌われている「明るい」という文言は，性格，表情で曇りがなく，晴やかであることを意味し，児童にとってわかりやすく，子供達のあるべき姿，願いとして表現されていると思える。

また中学校で最も多く歌われている「希望」は，こうありたいと願い，望むことであり，またその気持，将来に対する明るい見通し，可能性を意味し，中学生という多感な時期にこれから進む将来に明るい，のぞみを持たせたいという切実な願いがこめられている。

このように，小学校，中学校と比較してみると，高等学校の校歌の歌詞は「真理」「理想」ともに，抽象的であり，人生のテーマとも言える。「真理の

追求」「理想の実現」は高校生に対して誠に適切な道徳的内容の表現と言える。

(2) 校歌に見られる身体の部位といのちの表現

①身体の部位　※数字は学校数

普通 (20)		商業 (7)		工業 (6)		農業 (5)		合計 (38)	
胸	9	胸	1	身	2	身	2	胸	10
眉	3	身	1	眉	2	手	1	身	7
手	3	腕	1	腕	1			眉	5
目	3	瞳	1					手	4
身	2							目	2
足	1							腕	2
体	1								
心耳	1								
肌	1								
眼	1								

②いのちの表現

普通 (20)		商業 (7)		工業 (6)		農業 (5)		合計 (38)	
力	10	力	2			力	2	力	14
生命	5	生命	2			生きる	1	生命	7
生きる	3	血潮	2			命	1	命	5
命	3	命	1			血潮	1	血潮	5
血潮	2					生業	1	生きる	4

身体の部位では「胸」「身」「眉」「手」の順になっているが，ここで特徴的なのは，「身」についてである。普通高校では２校で使われているのみであるが，工業高校では，６校中２校，農業高校では５校中２校で使われている。「胸」の10校について，「身」は７校で使われて非常に特色があると言える。技術を身につける実業系高校において見られる特徴で体の部位というよ

り，身体そのものを表わす文言が「身」と考えられる。

この身体の部位について，全体的にみると福岡市の小学校，中学校と同様に，上半身を表わす文言が圧倒的に多いことがわかる。

福岡市小学校（143校）

(1) 手	30.0%
(2) 胸	24.4%
(3) 肩	11.1%
(4) 命	9.7%
(5) 瞳	6.9%
(6) 体	6.2%
(7) 腕	4.1%
(8) 眉	3.4%
(9) 足	2.0%

「胸をはりて……」，「……を胸に秘め」「手をつなぎ……」などはすべて上半身の動作であり，この動作は心の中の思いを表現するのに必要な要素を多く含むと考えられる。大庭氏は「歌の中には，身体の部位を採用して，心の姿勢や意気を象徴させている」(注7)と述べている。私も同感である。

胸をはって堂々としてほしいという願いが読みとれる。この文言によって，目指す生徒像が浮び上がってくる。このように校歌の中に歌われる身体の部位については，生徒の姿を表現するという効果が見られる。

「いのち」の表現方法は表の通り全体で6種の表現にとどまった。その中でも校種を問わず多く使用されているのは，「力」である。38校中14校の校歌で歌われている。「力」の意味を調べてみると，「①自らの体や他のものを動かし得る筋肉の動き，②気力，精神力，根気，精根，③能力，力量，実力，④ほねおり，努力，⑤たよりとするもの，よりどころ」(注8)などがある。校歌の中では，「力を出す」「力の限り」「力満つ」「あふれる力」などと使われているが，非常に抽象的である。しかし，「力」と聞けば，誰れもが「勢い」という雰囲気をかもし出すものである。この力強い感じが校歌には，必要な要素の一つと考えられる。

(3) 校歌に見られる色彩の表現

※数字は学校数

普通 (20)		商業 (7)		工業 (6)		農業 (5)		合計 (38)	
青	6	緑	3	青	3	緑	2	緑	12
緑	6	紫	1	白	3	紫	1	青	9
白	3	白亜	1	緑	1	黄金	1	白	6
蒼	2			白亜	1			紫	2
紺碧	1			赤	1			蒼	2
丹	1			黒	1			白亜	2
白銀	1								
あかね	1								

※緑は浅緑，若緑を含む

校歌の中には，イメージを豊かにする作用として色彩が歌われている場合が多い。表で示す通り，緑，青，白が38校中27校で歌われていることがわかる。

青と緑の用いられ方についてみると「山のみどり」「緑の山並み」「緑の季節」「青い山並み」「山が青く澄み」「松青し」などがある。この歌詞に使われている青と緑については，非常に似ていることがわかる。青が形容している事物は，緑が形容している事物とほとんど同じであり，実際は緑色であるものが多い。このことについて，「人はなぜ色にこだわるか」の中から，引用してみたい。「歴史的に，昔は，中国や日本では青と緑という色名を混用し，一様に青といっていた —— 中略 —— 青蒼（空の色），青ざめるなどは青であるが，青翠（山の色），青虫などの青は緑であろう。未熟なさまを青くさいと言うが，英語でもグラシー・スメリングといいやはり草っぽい(緑)と表現するのである。—— 中略 —— 北京の故宮のなかにある高さ6メートル，長さ31メートルの大きな陶製の丸竜壁（清の乾隆帝38年，1773年製作）の波濤（変型青海波）は緑色に彩色されている。青（水色）は緑色で表現されているのである。—— 中略 —— その文化を入れた日本で，青と緑を色名として混用していたということは，生理的な色彩識別能力がなかったいうのではなく，その文化が，色の区別をあえて必要とせず，色彩語彙の分化がお

こなわれていなかったのである。」(注9)

青と緑の混用は中国から日本に文化が伝わった頃からはじまっているようであり，現在まで続いていると考えられる。このようなことから，校歌の中でも混用が見られると考えるべきであろう。

そこで「あお」について辞典を見ると「①三原色の一の晴れた空の色，②緑色，③腕まえなどの未熟なことを表わす。」(注10)このように，はっきりと「緑」の記述が見られる。

また，緑色からの連想として知られている象徴語として「若々しい，新鮮，有望，平静，寛ぎなどがあり西洋人の場合でも，ほぼ類似の内容があげられる。そして洋の東西を問わず緑色から直接思い浮かべる対象はやはり自然の色である」(注11)

また色の事典によると「緑といって，私達が真先に思い浮かべるのは木々の緑でしょう。そして緑を目にすると誰れしも心の安らぎを覚えます。つまり緑は生命や希望，ひいては，平和や安定を象徴する色なのです――中略――緑は誰の目にも美しく見え，気分をリラックスさせます。」(注12)と述べている。

この二つの記述にもあるように，ほとんどの人が緑と聞くと自然をイメージし，心の安らぎを覚えるのではないだろうか。つまり，校歌に歌いこまれている緑（青）は歌う側に自然とその色をイメージさせ，安らぎを与える効果をもっていると言ってもよい。この緑（青）の表現は，次の表のように，小学校，中学校においても実に多く歌われている。

福岡市小学校（143校）

(1) 緑	48.2%
(2) 青	14.6%
(3) 白	13.9%
(4) 茜	3.4%
紫	3.4%

福岡市中学校（67校）

(1) 緑	41.7%
(2) 青	7.4%
(3) 紫	5.9%
(4) 青	2.9%
(5) 紺 碧	1.4%
七 彩	1.4%

(4) 校歌に見られる生徒表現，学校表現

①生徒表現　※数字は学校数

普通 (20)		商業 (7)		工業 (6)		農業 (5)		合計 (38)	
われら	8	われら	5	われら	5	われら	1	われら	19
若人	7	若人	1	若人	3	わが	1	若人	11
若き生命	3	友	1	健児	1	学友	1	若き生命(命)	
生徒	2	友輩	1			君	1		4
友	1	学徒	1			健男児	1	学徒	3
若き心	1	健児	1					健(男)児	3
わが	1	若き命	1					友	2
		若き瞳	1					わが	2

②学校表現

普通 (20)		商業 (7)		工業 (6)		農業 (5)		合計 (38)	
校名	10	校名	4	校名	3	学び舎	1	校名	17
学び舎	5	母校	4	学び舎	1	窓	1	母校	9
母校	4	学舎	3	母校	1			学び舎	7
甍	2	学園	1	学窓	1			学舎	4
学園	1			窓	1			窓	4
窓	1			学塔	1			学園	2
学舎	1							甍	2
揺藍	1								

校歌の中に見られる高校生の呼称の種類と頻度は「我等(われら)」が最も多く，続いて「若人」となっている。これは，校種を問わず，いずれの学校においても共通していると言える。

この「我等(われら)」は自分たち，私達，われわれという意味をもっているが，「われら」=「一体感」というイメージが強い。学校の中で一体感をもって集団生活を営むことは，誰れもがよりよい学校生活を送るのに，さらに社会で生きていく過程において，大切な要素である。これらの校歌を何回も歌っているうちに，ひとりひとりが自覚していくのである。また「われら」は皆で歌う

ことによって，全体に一体感をもたらす効果をもっていると言える。

この「我等」という表現は，次の表の通り福岡市の中学校においても全く同様の傾向を示している。

福岡市中学校（67校）

(1) 我　等	70.1%
(2) 若　人	34.3%
(3) 健　児	2.9%
(4) 乙　女	1.4%
(5) 若　者	1.4%

また，学校名を校歌の中に表記している学校は38校中17校で全体の45%に及ぶ数字である。続いて「母校」「学び舎」の順である。

校歌は「その学校の説明文である」と，まえがきで述べたが，学校名が入っているものは，説明文としては，ほぼ完全なものと言える。歌詞を見て，また歌詞を聞いて，他人が，その校歌の持主を理解するためには，学校名が入っていると，明らかに理解しやすい。

また，歌う側も学校名を歌うことによってその学校に通学している。または通学したという自覚と母校に対する愛着と再確認が生まれてくるのではないだろうか。ましてや歴史の古い学校においては，代々歌い継がれた校歌によって，同窓の意識が高まり，連帯感が増すのである。そして，自分達の学校を暖い存在，大きな存在，大切な存在として感じるのである。

(5) 校歌に見られる植物，動物

花，草，木などの植物が校歌の中に歌われている。最も多いのは「花(華)」で，次に「桜」，「楠（樟)」「松」の順であった。植物の言葉の用いられ方には，大きく二つに分けることができる。一つは「実際の存在としてのもの」，もう一つは「たとえの存在としてのもの」である。これを実際の校歌の中で見ると次のように使われている。

例えば，「映ゆる桜」，「春爛漫の桜花」「映えきそう桜が丘」「花を映す」

①植物　　※数字は学校数

普通 (20)		商業 (7)		工業 (6)		農業 (5)		合計 (38)	
花(華)	7	花橘	1	花	2	花	1	花(華)	10
桜	3	若桐	1	椿	1	松	1	桜(桜花)	4
楠(樟)	3	桜花	1	梅	1	麦	1	楠(樟)	4
もみじ	2	松	1	楠	1			松	3
青葉	2							青葉	2
櫨	2							櫨	2
大木	1							もみじ	2
草	1								
瑞穂	1								
松	1								
蓬莱	1								
若草	1								
杉									

②動物

普通 (20)		商業 (7)	工業 (6)	農業 (5)		合計 (38)	
鳥	1			鳥	1	鳥	2
小鳥	1						
雲雀	1						

などは実際の存在である。つまり実際の植物（花）を歌っている。これこそ，どのような環境に，また，どのような場所に学校が建っているかを示している大切な要素の一つである。また，「文化の花」，「希望の花」，「友愛の花」などの表現が見られた。これらは，たとえの存在としてのものである。このように二つにわけることができる。

花は総称での意味の外に，「①サクラの花の総称，②ウメの花の総称，③美しいことやはなやかなこと，④ほまれ，さかえ，⑤最も評判の良いもの，時めくこと，栄えること，⑥最も楽しいこと，――一番よい季節――以下略――」(注13)などがある。④，⑤，⑥のように，すばらしいもの，こと，栄

えのさまを表現するのにやはり「花」という語が用いられる。また，「花」は，①，②のようにある花をさすこともある。特にサクラは古文の世界でも多く用いられている。

校歌に歌われている桜は，前記したように「映ゆる桜」，「春爛漫の桜花」などは，はなやかに咲き乱れている。咲き誇っている様子を歌ったものである。それは，その学校がすばらしい環境にあるという説明と，学校自体の華やかさを表現するため，さらには，一人一人のこれからの人生の華やかさに対する希望などを表わしているのだと考えられる。

また，「楠（樟）」は佐賀県の県木に指定されていることから，校歌の中に歌われているものと見ることができる。

校歌の中で植物が何らかの形で38校中27校に歌われていることは，日本の四季との関係があるように思える。それぞれの四季にあらゆる植物が芽生え，繁茂する。花や木を大切に思う気持は，日本人の中に定着しているのではないかと思える。古代王朝の人々が，自然を愛し，和歌を詠むということから，花や木に思いをはせた気持が現在まで脈々と受け継がれているのであろうと思える。

動物についての表現は，校歌においては，非常に少ない。佐賀県の高等学校においても４校に見られたが，ごく少数である。しかし動物の中でも鳥が歌われているのを見ると，何事に対しても，次へ次へ，上へ上へと向上を目指していこうという願いがこめられているように思える。

(6) 校歌に見られる自然群

ア．野山関係

農業高校を除く３校種において，それぞれの学校で，「山」が最も多く歌われている。全体的に見ても，「山」は群を抜き，実に，28校，約70％の学校で歌われていることがわかる。佐賀県の山にも種々の山が存在する。高い山，低い山，誰れでも知っている「背振山」のような山，伝説をもつ山などがある。この山について少し記してみたい。

※数字は学校数

普通 (20)		商業 (7)		工業 (6)		農業 (5)		合計 (38)	
山	10	山	3	山	5	大地	2	山	19
野	9	丘	2	丘	2	山	1	野	13
山なみ	3	嶺	1	野	2	原	1	丘(岡)	7
丘(岡)	3	野	1	大地(地)	2	土	1	大地(地)	5
嶺(峰)	3	岳	1	山脈	1	岳	1	嶺(峰)	4
大地(地)	3	山脈	1	原	1	野	1	山なみ	3
里	2							里	2
庭	1							岳	2
谷	1							原	2
土	1							山脈	2
								土	2

「山を仰ぐ」「山は呼ぶ」「高きを仰ぐ」「山の気高さ」などの表現が見られる。中でも「山を仰ぐ」という表現は数多く見られた。「仰ぐ」は言うまでもなく，上を向く，尊敬するなどの意味をもっている。「山を仰ぐ」という表現は，その学校が山を見上げる場所に建っているという環境説明の役割を果たしている場合がある。しかし，「仰ぐ」は見上げるだけの意味ではなく，見上げる対象に対して敬意を表わしている表現ともとれる。このような表現によって，「山」自体が尊敬される存在になるだけでなく，その学校自体も堂々とした様子，品位をもっている様子がおのずから，浮び上ってくるように思える。

また，「高い」と「山」の組み合わせた表現も多く見られる。これは，ただ距離的なもののみの「山が高い」という意味とは少し異なるように見える。即ち山の“存在”が高いという意味も含まれるのではないかと考えられる。日本は山の多い国土であるため，身近かであり，尊敬の対象である。

日本の山岳崇拝には，山には神霊が降臨するという考え方がある。その考え方は，古代にはじまり，現代でも日本各地に残っている。神は最高の存在であり，その神が降りてくる山も当然，最高の存在となり得るのではないか。

このようなことから，多数ではないが校歌に，「高い」と「山」が表現されていることは理解できる。

次に多く表現されているものに「野」がある。佐賀県は稲作が盛んな大きな平野をもつ。この平野は佐賀県を説明するのに誠に適切である。このようなことから，校歌に反映したものと考えられる。

イ．海洋関係，河川関係

※数字は学校数

普通 (20)		商業 (7)		工業 (6)		農業 (5)		合計 (38)	
海	11	浪(濤)	2	海	3	海	3	海	18
汐(潮)	6	海	1	波	2	渚	1	波(浪)	8
潮風	3	彼岸	1	浪	1			汐(潮)	6
浪	3	海原	1	海原	1			潮風	3
渚	2	海面	1					渚	3
凪	2	霊泉	1					凪	2
沖	2							沖	2
浜辺(浜)	2							海原	2
潟	1							浜辺(浜)	2
潮騒	1								
磯	1								
いずみ	2	滝	1	川	3	瀬	1	川	6
川	1	瀬	1	水	2	川	1	瀬	3
温泉	1	川	1	瀬	1	水	1	水	3
湯	1							いずみ	2
清水	1								

海を歌っている学校は，38校中18校と約50％である。佐賀県は北に「玄界灘」，南に「有明海」と二つの特徴的な海をもっている。このようなことから考えると，海が多く詠まれるのは納得できる。

校歌はよく分析してみると，一番と二番の歌詞の中に，「山」と「海」が

両方使用されていることが多くある。陸地の代表は山であり，海洋の代表は海であることから対比する形で両方が使用されているともとれる。

校歌の中で，山と海が相対として，存在することを見ると，そこにはある種の意味が考えられる。即ち，山は上へ上へと向上をめざし，目標を達成しようとする気持を表わすために用いられ，「海」は，「広い」や「ゆたか」という表現が前後につくことからも，落ちつき，ゆったりした構えの象徴として表現されたものと考えられる。

人間は，「山」の象徴的要素と「海」の象徴的要素の両方をもっている状態で心が満たされ，豊かなバランスのとれた表現として，「山」と「海」が校歌の中に歌いこまれていると考えられる。

もう一つの「波（浪)」が，8校において歌われているが，「次から次へと押し寄せてくる人生の荒波を乗りこえていこう」という意味がこめられていて，正に，これから先の人生に対する思いが伝わる。この，「海」，「波」についても校種による差は見られない。

ウ．気象，天文関係

気象・天文関係の表現も，校歌には多くの表現がなされている。その中でも「風」「光」が多く歌われていた。「風」は普通科，農業科の高等学校において多く歌われており，全体的にも38校中，19校と50％学校で採用されていることがわかる。「光」は商業科，工業科の高等学校において多く歌われており，38校中18校とほぼ50％の割合になっている。「朝」「空」がこれに続いている。

「風」の用いられ方を見ると，「風はさわやかに」，「朝の風」，「世紀の風」などがある。校歌の中の「風」には，「花」の場合と同じように，大きく分けると二つの用いられ方があった。一つは，さわやかに吹く風を表現することによって，その学校のイメージを清明なものにしているというもの。もう一つは，“自らがおこす風”とでも言える意味で用いられているものである。

次に，「光」の用いられ方についてみる。「光ゆたかに」，「青雲光る」，「前

※数字は学校数

普通 (20)		商業 (7)		工業 (6)		農業 (5)		合計 (38)	
風	10	光	4	光	3	風	3	風	19
光	10	風	3	風	3	空	2	光	18
朝	9	朝	2	雪	2	光	1	朝	13
日	8	星	2	空	2	朝夕	1	空	12
空	6	空	2	青雲	2	朝	1	日	9
雲	6	雲	1	朝夕	1	夕	1	雲	8
朝日	4	黎明	1	夕日	1			星	6
星	3	日	1	朝	1			朝日	4
夕	3	夕日影	1	星	1			夕	4
あした	2			朝雲	1			青雲	4
青雲	2			雲	1			あした	2
暁	2			夕日	1			暁	2
星影	1							夕日	2
霧	1							朝夕	2
虹	1							雪	2
あさばらけ	1								
嵐	1								
夕日	1								

途に光りぞみたん」，などがある。校歌の光にも，大きくわけて二つの使われ方がある。それは，実際に“太陽などからさし込んでいる光”と，「愛の光」のように，“たとえ”として用いられている光である。調べてみると，光には「①光ること，光るもの，②視神経を刺激して視覚を起こさせる物理的対象，③輝き，美しい色，つや，④威勢，威光，⑤希望，光明」(注14)などの意味がある。

つまり，「光」は，①②③の意味で用いられている場合と，④⑤の意味で用いられている場合がある。

「風」と「光」は日本において，また世界においても，人が豊かに生き，栄えていくことを無視することはできない自然現象だと思われる。このよう

な意味から校歌の中に「風」,「光」が多く歌われていることは理解できる。

(7) 校歌に多く用いられている文言

前述した(1)の道徳的な内容表現から,(6)の校歌に見られる自然群まで記載した文言以外で多く使用されている表現をまとめてみた。

普通,商業,工業系高校において一番多く,全体でも28校と70%以上の学校で用いられている表現は「高」であった。「高き理想」,「山高し」などの表現が多く用いられていたことが理由の一つと言えるが,「高」は,その他にも「誇り高く」,「高く羽ばたき」などのさまざまな場面,部分で用いられていた。前述したように,人は,向上意欲,飛躍願望などの前向きに生きていこうとする思いを強くもっていて,人生を歩む上で必要な要素と思っているためであり,またそうありたいという願いのあらわれであると思う。次に多いのが「希望(望み)」である。全校種において上位にきており,68%近い割合を示していた。「希望」や「望み」は,やさしい表現であることもあって,小学校,中学校においても非常に多く用いられていることは前述したとおりである。

「希望」は今まで挙げてきた文言と同じように,前向きに生きるためには常に持っておく必要のあるものであるように思う。希望は“+(プラス)の状態”から,つまり“自分にとって良い状態”からさらにプラスした状態を望む時に抱くこともあるが,“−(マイナス)の状態”を“ゼロ”または,“+(プラス)の状態”に押し上げたい時に抱くことが多いように思われる。人生,何事も順調にいくという人は多くない。多くの人が一生のうちに,自分にとってプラスの状態とマイナスの状態を味合うのである。その励ましとなる言葉が「希望」,「望み」ではないだろうか。このように解釈してみると,常に前進するような表現のみでなく,落ちこんだ状態から,はい上ってほしいという願いが込められて,力になる表現が校歌には数多く用いられていることがわかり,校歌の奥深さを改めて感じものである。

次に「若」「清」「道」「ゆたか」と続いている。これまで校歌に使用され

※数字は用いられた総数

普通		商業		工業		農業		合計	
高い	16	高い	5	高い	5	道	4	高い	28
希望(望み)	11	栄	5	希望(望み)	4	国	3	希望(望み)	22
清(潔)	10	若き	5	ああ	3	ゆく	2	若	19
ゆたかに	10	いそしむ	3	伝統	3	修める	2	清(潔)	16
若	9	映ゆる	3	輝く	3	のぞみ	2	道	16
求め	9	誇り	3	清し	3	高い	2	ゆたか	14
輝き	8	学び	3	国の	3	集い	2	求め	12
道	8	希望(望み)	3	ひらく	3	ひらく	2	輝き	12
仰ぐ	7	立つ	3	見	3	窓	2	仰ぐ	12
久遠	7	雄々しい	2	仰ぐ	2	ゆたか	2	ひらく	12
立てば	7	勢う	2	あふれる	2	世	2	栄え	12
こころ	6	仰ぐ	2	新	2	聞け	2	立つ	11
涯(果)	6	進む	2	究め	2	清き	2	学ぶ	11
ひらく	6	そびえる	2	史	2	巧	2	燃ゆる(萌)	10
ひろく	6	ああ	2	誠実	2			ああ	10
平和	6	文化	2	澄む	2			文化	10
燃ゆる(萌)	6	古	2	精(気)	2			行く	9
学ぶ	5	道	2	遠く	2			久遠	8
ああ	5	磨	2	流れ	2			見(観)	8
競う	5	求める	2	名	2			新	8
越え	5	燃ゆる(萌)	2	日本	2			究め	8
さや(かに)	5			はるか	2			さや(かに)	7
栄え	5			文化	2			こころ	7
世界	5			誇り	2			涯(果)	7
強く	5			誉	2			ひろく	7
常(恒)	5			学び	2			西	7
永久	5			道	2			映ゆる	7
匂いて	5			磨	2			夢	7
見(観)	5			燃ゆる	2			歴史	7
落ちて	5			若	2			世	7
				幸	2			流れ	7
				夢	2			満ちる	7

ている文言は，向上意欲，飛躍願望が歌詞の中に多く歌に込まれていると述べてきたが，ここでもその現象は明らかであった。

このような中で，一つ気になる文言がある。それは「西」である。「西」の文言が7校に使用されているのは注目に値する。「南」3校，「北」3校，「東」1校，であるが，「南」「北」「東」は学校自体の自然群についての地理的説明など，方角そのものを表わすものとして使用されている。「西」についても，方角そのものを表わす文言として使用されているものもあるが，次の二つは明らかに異なることがわかる。即ち，「西より寄せし文明」，「西洋より来る文明」は，単なる方向ではなく，西洋，西欧のことを指しているように思える。経済的な発展，豊かさを目指す最先端は，やは西洋諸国であったと思われる。日本はその知識，技術をいち早くとり入れ，吸収，発展させ，先進国の仲間入りを目指していたと考えられる。

江戸時代，日本は鎖国状態に入り，外国との通商交通を断った。そんな中，唯一外国との交易が行なわれていたのが，長崎であった。限られた交易相手の中国とオランダから，長崎に続々と文明が入ってきた。その影響は佐賀県にも大きく及んでいることがわかる。

つまり「西」という方角は，佐賀県の地理的説明をする役目をするだけでなく，佐賀の発展を願う上で格別な存在となっていると言えるのではないだろうか。

その他にも，表に挙げているように，様々な表現が数多く用いられていた。それぞれの文言が，歌詞の中でそれぞれの役割を果たし，すばらしい，学校，すばらしい生徒，すばらしい人間を目指す姿をたくみに表現しているように思う。

(8) 校種別独特の表現

高等学校の校歌を分析してみて，強い印象を受けたのは，実業系高校において，校種独特の表現が見られることである。特に工業高校，農業高校に多く見られる。

たとえば，伝統ある佐賀工業高校の歌詞の一部には，「鉄打つ音のそうそうと」「工(たくみ)の業(わざ)の道ふかく」「鉄打つ腕(かいな)颯爽(さっそう)と」や，唐津工業高校の「研めん真理，鍛えん技術を」，「磨かん工(たくみ)，創らん歴史」，鳥栖工業高校の，「究めよ原理，技の道」「ひびけ練磨の鎚(つち)の音(おと)」などは，非常に具体的で，工業的動作が歌われていることがわかる。

また農業高校においては，佐賀農業高校の歌詞の一部には，「千町(ちまち)の穂波果もなく」，「血潮たぎりて鍬にぎる」や伊万里農林高校の「青春やかの麦の波」「耕転の道，世に伝う」などが見られる。このような農業を直接かかわりのある文言を具体的に歌うことにって，農業高校独特の校歌を形成していることがわかる。

しかし，何と言っても普通高校には全く見られず，実業系高校に見られる表現として，国家の発展，国の強運を歌った歌詞が多く見られることである。例えば次のような文言がある。

工業系

佐賀工業高校

・「国の富強を固めゆく　われらがほこりをおもふかな」

・「かがよう国の光なる　われらがほこりをおもふかな」

・「国の運命(さだめ)を担いゆく　われらがほこりをおもふかな」

農業系

佐賀農業高校

・「奢侈(しゃし)の流れもいずこにか　国のかための堅実(けんじつ)の　質は我等の身と共に」

・「国の本(もと)なす農業の　栄(さかえ)もろ手に司(つかさど)る　我等西肥の健男児」

商業系

伊万里商業高校

・「富国の使命担(にな)いて立てる　われらの行手希望(のぞみ)にみてり」

・「不羈独立(ふきどくりつ)の標(しるし)を高く　進むわれらの雄姿(おすがた)を見ずや」

このような文言は普通高校と根本的な違いを見せている。

実業系高校は，普通高校と違い，それぞれ特殊な技術・技能を身につけていくものであり，その身につけた技術，技能は自分自身と自分の人生において糧になると同時に，日本の発展のために重要なものであるという。時代背景と思想が根本に流れていると思われる。「商業，工業，農業の発展」=「日本の発展」と考えられるのではないかと思われる。

明治維新によって，西洋諸国に対抗して，国家を発展，成長させていくためには，その政策の一つとして，富国強兵政策，殖産興業政策を推進する必要があった。近代的な産業が，軍事工業を中心に発展していくことは，自然の成りゆきであった。このような思想が根底にあり，実業系高校の校歌にも歌われているのではないかと見ることができる。

ただ，この校歌が，この平和な現在においても，歌い継がれていることに対しては，ある種の疑問を抱かざるを得なかった。今後，実業系高校の歌詞については，単なる文言だけでなく，歴史的背景や学校設立の思いなどに研究を深めていくことが課題として残る。

おわりに

今回，佐賀県の高等学校の校歌の歌詞を分析してみると，小学校，中学校にみられない特色と，共通してみられる特色があることがわかる。また，高等学校においては，実業系高校において，大きな特色を見ることができた。

まず，校歌に見られる道徳的な内容表現では，「真理」「理想」の表現が非常に多く見られる。「真理」「理想」は，生涯追い続けるものであり，人間今に満足せず，次を追い求める姿は，すばらしく，高等学校の校歌に使われる文言として適切である。小学校においては，「明るい」，中学校においては，「希望」という平易な表現が見られたが，高等学校においては，抽象的であり，人生のテーマとも言える文言が特色の１つである。

第二に，身体の部位の表現は，小学校，中学校と同様に，「胸」「手」，など身体の上半身に関する文言が多く使用されている。「胸はって」など，「堂々

として」という願いが読みとれる。この文言によって，めざす生徒像が浮び上ってくる。

第三に色彩に関する表現でも，小学校，中学校と同様に，緑（青）が校種を問わず，多く用いられている。緑（青）色は，歌う側にさわやかなイメージを与えるのではなく，心の安らぎを与えると同時に，これからの「人生の栄え」への希望をもたせるような役割が考えられる。

第四に，植物では「花」の表現に多様性がある。「映ゆる桜」，「春爛漫の桜花」などは“実際の花”を意味するが，「文化の花」「希望の花」などは，“たとえの花”と二つ分けることができる。実際の花は，学校の環境を表現し，たとえの花は，これから先の人生の栄えに対する希望を表現していると読みとれる。

第五に，自然群の表現では「山」，「海」の文言が多く見られ，「山」は向上し，目標を達成しようとする気持を表わす時に用いられ，「海」は，落ちつき，ゆったりとした構えの象徴として表現されていると，読みとれる。

第六に，校種別の特色として，実業系高校において，工業高校の「鉄打つ」「鎚の音」，農業高校の「鍬にぎる」，「耕運の道」などは，独特な表現であり，実学的，実践的な文言と言える。

また，工業，農業，商業の高校において，「富強を固めゆく」，「富国の使命」，「国の運命を担いゆく」「国のかための堅実(けんじつ)に」「国の本(もと)なす農業」「富国の使命担いて立てる」などは，独特の表現であり，普通科の高校では見られない表現である。正に自分の技術，技能の向上は，日本の発展のために重要であるという思想が根底に流れていると思える。即ち，「商業，工業，農業の発展」=「日本の発展」と言っても過言ではない。しかし，この校歌が現在でも変わることなく，脈々と歌い継がれているところに，ある種の意味があると思わざるを得ない。

このように見てくると，学校のシンボルである校歌を歌い，その意味をよく理解することは，その学校の教育方針，教育目標のみならず，いつも目にする，山，川，花，などの自然環境が思い出され，心に残る不思議な力を持っ

ていることがわかる。正に生徒達に対する応援歌であり，同窓の共通の財産であると言える。

この研究をすすめるにあたって，佐賀県教育委員会の方々に大変お世話になったことを付記し，お礼を申し上げたい。

引用文献

注１　拙論「校歌に関する調査研究」福岡女学院大学　研究紀要 11 号　P 45

注２　同上

注３　国語大辞典　P 1342　小学館

注４　日本史大辞典　P 22　平凡社

注５　国語大辞典　P 2460　小学館

注６　広辞苑　P 2794　岩波書店

注７　校歌・校訓にみる教育理念の研究　P 43 大庭茂美

注８　広辞苑　P 1705　岩波書店

注９　人はなぜ色にこだわるか　P 150　KK ベストセラーズ

注10　広辞苑　P 9　三省堂

注11　赤，橙，黄，青，藍，紫 —— 色の意味と文化 —— P 143　青我書房

注12　色の事典　P 128　西東社

注13　広辞苑　P 1605　三省堂

注14　広辞苑　P 461　三省堂